

令和 7年 9月

日本科学未来館イベント「こどもからみる不思議世界探求」
にご参加いただいた皆様へ

2025年 8月 1-3 日に上記イベントにご参加いただき、誠にありがとうございました。多くのお子さんとその保護者の方に参加協力をいただき、大変貴重なデータを得ることができました。心より感謝いたします。

ここでは須藤の担当した「多様な他者をどう捉える？」というテーマの心理学実験について、基礎的なデータ解析が終わりましたので、参加された皆様全体の傾向について報告します。

研究実施者：須藤美織子（国際基督教大学）

E-mail: mioko.sudo@icu.ac.jp

研究統括者：山口真美（中央大学）

研究概要

異文化間の円滑なコミュニケーションには、「自分の当たり前が必ずしも相手に通用するとは限らない」という視点が不可欠です。そのため、異文化理解を促す教育では文化の「違い」に注目することが多くなっています。ただし、相違点を過度に際立たせると、「異文化の人とは理解し合えない」という印象を与え、相手との心理的距離が拡大してしまう可能性があります。そこで本研究では、文化間の「違い」だけでなく「共通点」にも注目した教育的アプローチの効果を検証することを目的としました。

お子さんには、日本ではあまり知られていないアフリカの国・ベナン共和国（以下、ベナン）について学んでいただきました。教育内容は2種類あり、①ベナンの文化（日本との違いや共通点）に関する情報を学ぶグループと、②ベナンの気候や自然環境といった文化以外の情報を学ぶグループのいずれかにご参加いただきました。教育の後には、ベナンの人々に対する理解や印象を測定するため、次の3つの課題に取り組んでいただきました。

1. 「あるかなないかな」課題：日本で一般的な行動（例：先生にお辞儀をする）とそうでない行動（例：家の中でビーチサンダルを履く）について、日本とベナンの子どもがそうした行動をとっている可能性を0（絶対にない）から100（絶対にある）の値で予測してもらいました（図1）。



図1. 「あるかなないかな」の問題例。

2. 「どれくらい好きかな」課題：日本とベナンの子どもの写真を提示し、それぞれの子に対して「どれくらい好きか」を0（すごく嫌い）から100（すごく好き）の値で評価してもらいました。



図2. 「どれくらい好きかな」で使用された写真の例。

3. 「ボタン早押し」課題：画面に表示された子どもの顔写真に対して、「うれしい表情」または「かなしい表情」のどちらかのボタンを押してもらいました（図3）。課題には、日本の子どもに「うれしい表情」を、ベナンの子どもに「かなしい表情」を押すよう指示する条件と、その逆の条件がありました。親しみを感じる相手ほど「うれしい表情」ボタンへの反応が早いとされることから、反応時間をもとに好意的態度を推定しました。

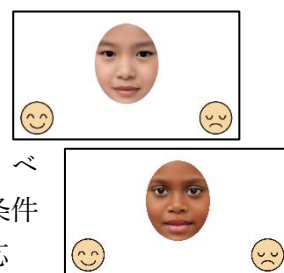


図3. 「ボタン早押し」で使用された写真の例。

教育内容によって課題への反応が異なるかを検討することで、異文化に関する学びが、その文化の人々への理解や親近感に与える影響を明らかにしようとしてしました。なお、課題の前にベナン文化について学んでいなかった②のグループには、すべての課題終了後に同様の文化教育を実施しました。

結果

「あるかなないかな」課題では、受けた教育内容による明確な差は見られませんでした。いずれの教育を受けたグループも、日本の子どもについては日本の社会的規範に沿った行動をすると予測し（例：「先生にお辞儀をしたことがある」可能性が高く、「家でビーチサンダルを履いたことがある」可能性は低い）、ベナンの子どもについては、日本の規範に合った行動をする可能性もあれば、そうでない可能性もあるという中間的な判断がなされていました（図4）。これは、受けた教育内容にかかわらず、児童期において、自文化では「当たり前」とされていることが、異文化の相手にとっても「当たり前」とは限らないことを理解していることを示唆します。

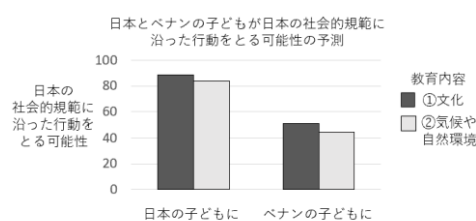


図4. 「あるかなないかな」における回答の平均傾向。

「どれくらい好きかな」課題においては、両グループとも、ベナンおよび日本の子どもに対して概ね中間的から好意的な評価を示していました。さらに、教育内容による差も確認され、ベナン文化に関する教育を受けた①のグループは、文化以外の情報（気候や自然環境）を学んだ②のグループと比べて、ベナンの子どもに対してやや高い好意的評価を示す傾向が見られました。この結果は、異文化理解を促す教育が、子どもたちの異文化に属する他者への親しみを高めるきっかけとなる可能性を示しています。

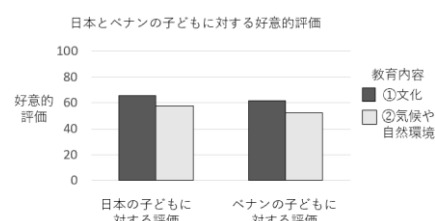


図5. 「どれくらい好きかな」における回答の平均傾向。

「ボタン早押し」課題では、教育内容による明確な差は確認されませんでした。また、日本の子どもに「うれしい表情」を、ベナンの子どもに「かなしい表情」を押すよう指示する条件と、その逆の条件とで反応時間の差は見られず、日本およびベナンの子どもに対して一方に強い親しみを示す傾向は確認されませんでした。

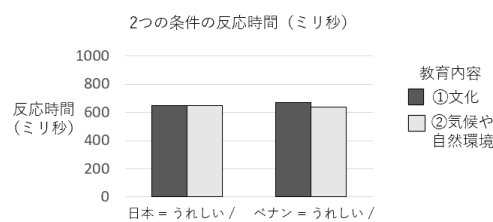


図6. 「ボタン早押し」における反応時間の平均傾向。

した。こうした結果が、教育によって日本とベナンの子どもに対する親しみの差が縮まったことを反映しているのか、それとも本課題が幼児を対象とした先行研究で主に用いられてきたため、児童の態度測定には十分に適していなかったのかは、現時点では明らかではありません。今後さらに検討を進めていく予定です。

また、保護者の皆さまには、異文化経験や関心、日本文化への帰属意識に関する質問紙にご協力いただきました。皆さまの回答とお子さんの課題における反応との相関を検討しましたが、明確な関連性は確認されませんでした。

今後も継続して調査を行い、本研究で用いている教育の効果についてさらに検討を進めていく予定です。こうした結果を踏まえ、より効果的な異文化教育のあり方や、その効果を適切に測定できる課題の検討を進めていきたいと考えています。